

漢字系統樹関連論文訂正録

善如寺俊幸（言語教育研究所）

gengokyoikukenyusho@gmail.com

【要約】

今年（2016年）1月に「漢字系統樹表2800」を公開したが、その際、2003～2009年に発表した「日」、「隹」、「木」、「冫」、「目」、「人」、「又」の漢字系統樹の一部を訂正しているので、それらをここにまとめて記す。

0. はじめに

2003～2009年に発表された「日」、「隹」、「木」、「冫」、「目」、「人」、「又」の各々の漢字系統樹が掲載された論集は『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第29, 30, 31, 32, 33, 34, 35号および第7回国際日本研究・日本語教育シンポジウム論文集『アジア太平洋地域における日本語教育』第1巻（香港日本語教育研究会）、『柏崎雅世教授退官記念論集』（ひつじ書房）である。それらの漢字系統樹に移動や削除、追加を施して「漢字系統樹表2800」が完成した。全体的に訂正前の漢字系統樹は常用漢字による検索しやすさに重きを置いたが、訂正後の系統樹では字源的繋がりにより重点を置いている。以下、各々の系統樹に注釈を付して訂正箇所を示し、紙面の許す範囲で注釈を加える。なお、注釈の不十分なところは「漢字系統樹2800解字」で補いたい。また「一群」、「一系」他の用語は、第27回日本語教育連絡会議論文集に発表した「漢字系統樹表2800」などに倣う。

1. 「日」の漢字系統樹

『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』（以下、センター論集）第29号に発表した訂正前の「日」の漢字系統樹は以下の通りである。「日」の漢字系統樹は最初に具体化した系統樹ということもあって、数ある字説の検証が上手くしきれていない。

I II III （系統）

日 昼晶

昌 唱娼

早 草¹

卓 悼²

朝 潮³

* 乾⁴（*は翰から羽を除いた字）

莫 暮募墓慕模幕膜漠

旦 担胆⁵

亶 壇⁶

易⁷場陽湯⁸揚腸傷

昔借籍錯措

昏婚⁹

10

春¹¹

暴爆曝¹²

13

訂正後の「日」の漢字系統樹

I II III (系統)

日 昼晶

昌唱娼

朝潮嘲

莫暮募墓慕模幕膜漠

旦担胆坦

昔借籍錯措

旬殉筭

春椿

暴爆曝瀑

易

易場陽揚腸傷瘍

湯蕩

* 隙 (*は隙の右半部の字)

注¹ 早系と卓系の移出

早系(早草)と卓系(卓悼)を是群に移出する。「早」については白川静の「匙の象形、仮借」説や説文解字の「日+甲、頭上に昇る日の出」説、藤堂明保他の「外皮の黒いクヌギの実」説など諸説あるが、「日+甲」説は篆文字形による点に難があり、「クヌギの実」説は『釈名』を引いて外皮の黒さが未明の暗さに通じるというところに無理があろう。消去法で残るのが「匙の象形」説となる。「是」の金文字形に「早」に近いものがあること、センター論集第29号に述べた日没を表す「莫」との関連説が他に認められないことを考慮して、匙の象形である是群に移すことにする。卓系も同様に消去法的に考えて是群に移す。

注² 朝系に追加

朝系の第3系統に「嘲」を追加する。

注³ *系の移出(*は翰から羽を除いた字)

(* (*は翰から羽を除いた字)は金文字形から吹き流しをつけた旗竿の象形とする『新訂字統』の字解が妥当と考えられるため、*系を*群(*は翰から羽を除いた字)に変えて移出し、第3系統に

「幹韓」を加える。

注⁴ 旦系に追加

旦系の第3系統に「平坦」の「坦」を追加する。

注⁵ 亶系の移出

亶系の「亶」は土壇の上に建つ神倉の象形とされる。下半部の「旦」は上半部の倉の土壇を表すもので「日」とは関係がない。センター論集第29号では下半部を日の出を表す「旦」としたがここに訂正し、亶系を亶群に変更して移出する。

注⁶ 易系の加入と易系の移動、追加

「易」が玉と台座と日光から成り、台の上の玉を通過して陽光が放射することを表し、「易」はその台座のない形とされる。『説文解字』の「とかげ、イモリ、ヤモリ」説や他の「カメレオン」説は採らない。この「易」は「賜」の「易」とは別系統である。「易」に繋がる「易」系を加え、それに「易」系を続け、第3系統に「腫瘍」の「瘍」を追加する。

注⁷ 湯系の独立

易系の第3系統に分類していた「湯」であるが、「放蕩」という時の「蕩」の追加により独立した湯系を立てる。

注⁸ 昏系の移出

「昏」は「氏」と「日」の会意で、婚礼など氏族の宴を表すが、この「日」が太陽なのか肉なのか定まらない。「氏」は氏族の長老が持つ肉を切り分ける小刀の象形であることはわかっているので、昏系を氏群に移出する。

注⁹ 旬系の加入

「旬」は「勹」と「日」の会意とされるが、「勹」の部分は甲骨文では龍神を表す龍の形をしていて、後に「勹」と書かれるようになったことが知られている。本来「勹」は身をかがめて体で包む人の形なので、分類しやすい「日」によって日群に分類する。

注¹⁰ 春系に追加

春系の第3系統に「椿」を追加する。

注¹¹ 暴系に追加

暴系の第3系統に「瀑布」の「瀑」を追加する。

注¹² *系の加入（*は隙の右半部の字）

*は玉の光が上下に放射している形とされるので、*系を日群に加える。（*は隙の右半部の字）

2. 「佳」の漢字系統樹

『センター論集』第30号に発表し、同第34号にて一部訂正を加えた「佳」の漢字系統樹は以下の通りである。

I II III (系統)

佳 進推唯稚携誰¹

隼準准

集雜

崔催

瞿觀權勸歛

雀確鶴

隻双(雙)

蔓獲穫護

翟曜濯躍

*奮奪 (*は奪から寸を除いた字)

維羅

雍擁

*応(應)鷹 (*は應から心を除いた字)

<訂正後の「佳」の漢字系統樹>

I II III (系統)

佳 進推唯稚携誰堆椎

隼準准

集雜

崔催

瞿觀權勸歛

雀確鶴

隻双(雙)

蔓獲穫護

翟曜濯躍

*奮奪 (*は奪から寸を除いた字)

維羅

雍擁

*応(應)鷹 (*は應から心を除いた字)

注¹ 佳群直系に追加

佳群直系の第3系統に「堆椎」を追加する。

3. 「木」の漢字系統樹

『日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク』に発表した訂正前の「木」の漢字系統樹は以下の通りである。

I II III (系統)

木 休森条染巢¹

林淋

本体鉢

末抹沫

未味妹魅昧

制製

束速勅

束練鍊²

果課菓裸

樂菓³

4

乘剩

朱殊珠株⁵

*漆膝 (*は漆の右半部の字)

訂正後の「木」の漢字系統樹

I II III (系統)

木 休森染巢桑沐

林淋

本体鉢

末抹沫

未味妹魅昧

制製

朱殊珠株

束速勅

果課菓裸

栗慄

乘剩

*漆膝 (*は漆の右半部の字)

注¹ 「条」の移出と「桑沐」の追加

木群直系の第3系統に分類した常用漢字の「条」は「そもそもは「條」の略字なので、又群攸系に移出する。略字を採用した常用漢字については、字解に直結する本来の旧字字形で分類することにする。また、2800字の中に「桑沐」を加え、ここに追加する。

注² 束系の移出

束系の「束」は生糸の束を煮出す精練法を例に「説文解字」などの「束」説を採用していたが、繭から製糸する工程を考えると白川の「束」（両端を縛る袋）説に部があると考えられ、「束」群に移出する。

注³ 楽系の移出

楽系の「楽」は木に鈴をつけた手鈴の象形であるが、木と鈴を分けるべきではなく全体象形と考えるべきなので、楽群を新たに立てて移出する。

注⁴ 栗系の加入

「栗」は甲骨文などから「果」と同様に、木の上に栗の実をつけた象形と分かっているので、栗系をここに加える。

注⁵ 朱系の移動

「朱」の字形が「制」に近いという理由で朱系を制系の次に移動する。ただ、字源論的に繋がりがあると言うわけではない。

4. 「卩」の漢字系統樹

『センター論集』第31号に発表した訂正前の「卩」の漢字系統樹は以下の通りである。

I II III (系統)

卩 叩

卩 迎 仰 抑

卩

卩 服 報

1

卩²

卩 詭 跪³

卩 苑 怨

卩 腕 碗

卩⁴ 肥

卩 絶 艶

卩⁵

卩 選 撰⁶

訂正後の「卩」の漢字系統樹

I II III (系統)

卩 叩

卩 迎 仰 抑

印

𠂔服報

令冷齡零命鈴

領嶺

𠂔苑怨

宛腕碗

危詭脆脆

巴（*）肥（*は𠂔の中に点を打った字）

色絶艶

邑（𠂔）都郵

注¹ 令系と領系の加入

「令」は礼冠を被って跪いた神官が神意を聞いている形で、礼冠を被った「𠂔」の象形なので、令系とその派生系である領系とともに加える。

注² 厄系の移出

「厄」は馬具の軛（くびき）の象形なので、厄群を新たに立てて移出する。

注³ 危系の移動

厄系の移出に伴い、危系を宛系の次に移動する。

注⁴ （*）の追加（*は𠂔の中に点を打った字）

「巴」の変形として参考までに（*）を追加する。（*は𠂔の中に点を打った字）

注⁵ （𠂔）の追加

「邑」の変形として（𠂔）を、それをパーツに用いた参考例として「都郵」を追加する。

注⁶ 巽系の移出

「巽」は神前に舞楽を献じる二人を表し、元の字の上半部は「巳巳」を一字で書いて、神前で舞う二人を表す。「𠂔」とは別系統なので、新たに*群を立てて移出する。（*は「巳巳」を一字にした字）

5. 「目」の漢字系統樹

『センター論集』第32号に発表した訂正前の「目」の漢字系統樹は以下の通りである。

I II III （系統）

目 看

眉媚

見現規視¹

*蔑（*は「目」の上に草冠の両端を書いた字）

覓寬

夢²

省³

直植值置殖

憲德聽

盾循楯遁⁴

相想箱霜

良銀根限眼恨痕

*懇壘（*は壘上半部の字）

民眠畏

訂正後の「目」の漢字系統樹

I II III（系統）

目 看省

眉媚

*蔑（*は「目」の上に草冠の両端を書いた字）

覓寬夢

見現規視靦

直植值置殖

憲德聽

盾循

相想箱霜

良銀根限眼恨痕

*懇壘（*は壘上半部の字）

民眠畏

注¹ 見系の移動と「靦」の追加

見系の第3系統に「靦」を追加する。また見系の「見」も祈祷師の呪術に関係のある字なので覓系の次に移動する。

注² 夢系の廃止

2800字枠に「儂い」を入れるつもりで夢系を立てたが、取り止め、覓系の第3系統に「夢」を分類する。

注³ 省系の廃止

2800字枠には「省」などは入らないので、省系は立てず、目群直系の第3系統に「省」を分類する。

注⁴ 「楯遁」の削除

盾系第3系統の「楯遁」を削除する。

6. 「人」の漢字系統樹

『センター論集』第33号および『アジア太平洋地域における日本語教育』第1巻に発表した訂正前の「人」の漢字系統樹は以下の通りである。

I II III (系統)

人イ¹

千

壬

廷庭艇

呈程

坐座挫²

从³

4

并併餅瓶

屏墀

*衆 (*は人偏+人偏+人の字)

宥沈枕⁵

欠飲吹軟炊款

次資姿⁶

7

儿冗

元冠頑玩

完院寇

兄競況祝呪

8

兌説銳税脱悦閱

兕⁹

鬼魂醜塊¹⁰

兕貌兜

充銃統

免勉晚婉挽¹¹

訂正後の「人」の漢字系統樹

I II III (系統)

人(イ)(*)企介 (*は人屋根)

千

壬

廷庭艇

呈程

从旅

従（從）縦

坐座挫

并併餅瓶

屏摒

*衆（*は人偏+人偏+人の字）

尢沈枕耽

欠飲吹軟炊款

次姿姿茨恣

咨諮

*羨（*は羨の下半部の字）

儿冗

元冠頑玩

完院寇

兄競況祝呪

僉驗險檢儉劍

兌説鋭税脱悦閱

兕（兒）

兕貌兜

充銃統

免勉晚婉

鬼魂醜塊

注¹ 「イ」の変更

人偏や人屋根はパーツとして用いられる変形なので、括弧付きの赤字で書いた後に参考例として灰色字を続ける。

注² 坐系の移動

从系と坐系の順序を分かりやすく改める。

注³ 从系の例示

从系の参考例を示す。

注⁴ 従（從）系の加入

常用漢字では分かり難いかもしれないが、从系に直結するので従（從）系をここに続ける。

注⁵ 尢系に追加

尢系の第3系統に「耽」を追加する。

注⁶ 次系に追加

次系の第3系統に「茨忒」を追加する。

注⁷ 咨系と*系の追加（*は「羨」下半部の字）

次系に関連して咨系と*系を続けて追加する。（*は「羨」下半部の字）

注⁸ 僉系の加入

兄系に関連して僉系を加える。

注⁹ 「兕」の旧字を追加

「兕」の旧字を参考までに示す。

注¹⁰ 鬼系を移動

鬼の全体象形を表す「畏」と「異」に繋げるため、鬼系を人群末尾に移動する。

注¹¹ 免系から「挽」を削除

免系の第3系統から「挽」を削除する。

7. 「又」の漢字系統樹

『センター論集』第34号、第35号および『柏崎雅世教授退官記念論集』に発表した訂正前の「又」の漢字系統樹は以下の通りである。

I II III （系統）

又 友¹

右²

又

* （*は「蚤」の上半部の字）

蚤 騷 搔

支 枝 技 肢 岐 妓³

殳 投 役 設 殺 疫 股 股⁴

* 擊 繫 （*は「擊」の「手」を除いた字）

殼 穀

段 鍛

* 没 歿 （*は「没」右半部の字）

段 仮 暇 霞

反 飯 板 版 返 坂 阪 販 叛

及 急 吸 級 扱 汲

叟 搜 瘦 嫂

奴 努 怒

攴教枚牧

5

攴修悠條⁶ (条)

微

徵懲

7

丈杖

史

事

吏使

更硬⁸

便鞭

父斧釜

夂決快⁹

*¹⁰ (*は「又」の上に「爪」を書いた字)

受授

爰暖援緩

争淨

恣隱穩

聿書筆律津¹¹

建健鍵腱

肅繡

隶逮隸

尹伊

君群郡

兼嫌謙廉鎌

丑紐¹²

訂正後の「又」の漢字系統樹

I II III (系統)

又 友双

右佑祐

又

* (*は「蚤」の上半部の字)

蚤騷(騷)搔(搔)

支枝技肢岐妓伎

殳投役設殺疫股殷毀

*擊繫 (*は「擊」の「手」を除いた字)

殼穀

段鍛

*没(沒)歿 (*は「沒」右半部の字)

段仮(假)暇霞

反飯板版返坂阪販叛

及急吸級扱汲

叟搜瘦嫂

奴努怒

攵(攴)教枚牧

*徹撤轍 (*は「育」と「攵」を左右に合わせた字)

攸修悠条(條)

微

徵懲

敢嚴

丈杖

史

事

吏使

更硬梗

便鞭

父斧釜

夬決快訣

争淨

恣隱穩

聿書筆律津尺(盡)

建健鍵腱

肅(肅)繡

求逮隸

尹伊

君群郡

兼嫌謙廉鎌

丑紐羞

注¹ 又群直系に追加

又群直系の第3系統に検索の参考までに灰色字で「双」を追加する。

注² 右系に追加

右系の第3系統に人名によく見られる「佑祐」を追加する。

注³ 支系に追加

支系の第3系統に「歌舞伎」の「伎」を追加する。

注⁴ 爰系に追加

爰系の第3系統に「毀損」の「毀」を追加する。

注⁵ *系の加入 (*は「育と夂」を左右に合わせた字)

夂系の次に*系を加える。(*は「育と夂」を左右に合わせた字)

注⁶ 「條」と「条」の入れ替え

常用漢字を先に記載する原則から、「條」と「条」を入れ替え、「條」を括弧付きにして後に記す。

注⁷ 敢系の加入

偏の部分が字源的に難解なため、敢系をここに分類する。

注⁸ 更系に追加

更系の第3系統に「梗」を追加する。

注⁹ 夂系に追加

夂系の第3系統に「秘訣」の「訣」を追加する。

注¹⁰ *系、受系、爰系の移出 (*は「又」の上に「爪」を書いた字)

*系とそれに続く受系、爰系を爪群に移出する。(*は「又」の上に「爪」を書いた字)

注¹¹ 聿系に追加

聿系の第3系統に「尽(盡)」を追加する。

注¹² 丑系に追加

丑系の第3系統に「羞恥」の「羞」を追加する。

参考文献

- 1) 尾崎雄二郎編(1993)『訓読説文解字注』東海大学出版会
- 2) 白川静(1995)『字訓』平凡社
- 3) 白川静(1996)『字通』平凡社
- 4) 白川静(2001)『白川静著作集2 漢字II』平凡社
- 5) 白川静(2000)『白川静著作集3 漢字III』平凡社
- 6) 白川静(2001)『白川静著作集4 甲骨文と殷史』平凡社
- 7) 白川静(2001)『白川静著作集5 金文と経典』平凡社
- 8) 白川静(2003)『漢字の世界1』平凡社

- 9) 白川静 (2003) 『漢字の世界 2』 平凡社
- 10) 白川静 (2004) 『新訂字統』 平凡社
- 11) 善如寺俊幸 (2003) 「日」の漢字系統樹 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集第 29 号』
- 12) 善如寺俊幸 (2004) 「佳」の漢字系統樹 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集第 30 号』
- 13) 善如寺俊幸 (2005) 「木」の漢字系統樹 『(第 6 回国際日本研究・日本語教育シンポジウム論文集) 日本研究と日本語教育におけるグローバルネットワーク』
- 14) 善如寺俊幸 (2006) 「卩」の漢字系統樹 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集第 31 号』
- 15) 善如寺俊幸 (2007) 「目」の漢字系統樹 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集第 32 号』
- 16) 善如寺俊幸 (2007) 「人」の漢字系統樹 1/2 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集第 33 号』
- 17) 善如寺俊幸 (2008) 「人」の漢字系統樹 2/2 『(第 7 回国際日本研究・日本語教育シンポジウム論文集) アジア太平洋地域における日本語教育』
- 18) 善如寺俊幸 (2008) 『『又』の漢字系統樹 1/3』 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 34 号』
- 19) 善如寺俊幸 (2008) 『『又』の漢字系統樹 2/3』 『柏崎雅世教授退職記念論集』 ひつじ書房
- 20) 善如寺俊幸 (2008) 『『又』の漢字系統樹 3/3』 『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 35 号』
- 21) 善如寺俊幸 (2010) 『漢字イメージトレーニング 500』 三恵社
- 22) 善如寺俊幸 (2015) 「漢字系統樹 2800」(加筆転載) 『第 27 回日本語教育連絡会議論文集』
- 23) 水上静夫 (1995 『甲骨金文辞典』 雄山閣
- 24) 諸橋轍次他 (1982) 『広漢和辞典』 大修館書店
- 25) 段玉裁 (1993 年版) 『説文解字注』 上海古籍出版社
- 26) 許慎 (中華民国 75 年版) 『説文解字真本』 台湾中華書局

(ぜんによじ としゆき)